

## 「草枕」の旅

現代文学研究会

井原・岡田・下兼  
水野・三好・森山

五月の連休（五月二日～五月六日）に私達「現代文学研究会」のメンバー十名は、夏目漱石の『草枕』の舞台となった熊本に旅をした。

山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。（『草枕』(一)）

という一節で始まる「草枕」は、漱石のいわゆる「非人情」という、俗世間を越えた世界を求める心境のよく表れた作品である。

私達は漱石のいう「非人情」がどんなものかを追体験しようと試み、広島から船で別府へ、そして「二百十日」の舞台となった阿蘇を廻って、目指す熊本へと出かけていった。

「路から左の方にバケツを伏せた様な峯が聳えている。」と描かれた金峰山は、まさしく台形の小さな安らかな山であった。熊本市の西に位置する、その金峰山を左手に見ながら、一路小天温泉への

道を迎った。周囲には竹林も多く、墨絵の世界を連想させた。

小説によると、漱石は熊本市内を朝早く発って小天温泉まで、徒歩で迎っている。しかし私達には少々無理ではないかということ、途中でパスで……。

歩き始めてしばらくは、原文を朗読したり、非人情や芸術観について話し合ったりしながら登ったものの、次第に不断の運動不足を感じてくる。明治の人の健脚さに驚くばかりであった。テーマである「非人情」とは裏腹に、話題は俗世間にどっぷりと漬ったことばかりになってしまふ。折角の雲雀の声に心を清められても、やぎとりを思い浮べたり、遠くに悠然と広がる有明海を眺めても、むつころうの料理法に花が咲いたりする。漱石は本当に、『採菊東籬下悠然見南山』『独坐幽篁裏 弹琴復长嘯 深林人不知 明月来相照』という出世間的の詩味を味わっていたのだろうかという疑問も出た。本当は、はやく茶屋はないかと思いつつ、無理矢理に非人情、非人情と自分に言いきかせて、歩を進めていったのかもしれない。或は旅行から執筆までの九年という時間が、現実の辛さを昇華させて、出世間的の詩味となっていたのかもしれない。

道路から少し横手に入った「峠茶屋跡」からは、細く入り組んだ旧道が残っていた。旧道は迷いやすいらしいが、折角の「草枕」の旅だから、道に迷うのを覚悟の上で、旧道に入った。密柑畑を縫ってゆくと、いかにも肥後もっこすといった風体のおじさんに出会い、道を探ねると、有難いことに、案内役を買ってでて下さった。この密柑畑は昭和以後のもので、以前は部落もない一本道だったらしい。地形は変わり、「草枕」の世界とはほど遠い現実となっている。

が、それでも往時を忍ばせるうつつそうと繁ったところもある。蛇でも出て来そうなこの旧道を、しっかりと踏みしめながら辿るとき、改めて漱石の非人情と、このおじさんの人情とが対比されて興味深く感じられた。

旧道と新道とが交わる地点で、この親切なおじさんと別れた頃には、白く霞む空から幾筋かの光が射していた彼方の海も、いつのまにか夕日を招いて朱鷺色に変わりつつあった。夕日と競うようにして、有明海に向かって下って行った。密柑畑と民家の間を抜け、道がようやく平らになった時、ほんのりと灯ったあかりが映る。それが那古井館であった。

三疊へ着物を脱いで、段々を、四つ下りると、八畳程な風呂場へ出る。石に不自由せぬ国と見えて、下は御影で敷き詰めた、真中を四尺ばかりの深さに掘り抜いて、豆腐屋程な湯槽を据える。〔草枕〕(七)

とあるその風呂場は、今は二つに区切られ、隣りに脱衣所がちょこんと作られている。

食事を済ませて、浴衣のまま外へ出た。たまに国道を走る車のライトに、民家の窓の灯りにぼっと小天温泉が浮ぶ。一人だけ少し離れて歩いて見ると、闇の中に着物が白く浮いてひらひらと動く様はまるで那美さんである。しばし非人情の世界に引き込まれた錯覚に陥る。

翌朝、宿の裏手の鏡が池を訪れた。池の水は澄み、岩と岩との間を鯉が泳いでいる。池の縁には、芥子に松、そして水芭蕉……。

「憐れ」の浮んだ那美さんが加われば、さだめし美しいことだら

う。「疲れ」の浮んだ私達でさえ、絵になった(?)位の池なのだから。

……これが那古井の地勢である。温泉場は岡の麓を出来るだけ崖へさしかけて、岨の景色を半分庭へ囲い込んだ一構えであるから……道理こそ昨夕は櫛子段を無暗に上ったり、下ったり、

異な仕掛の家と思った筈だ。〔草枕〕(八)

実際に漱石が泊ったという漱石館は、那古井館の裏の鏡が池より山にそってしばらく行った民家の裏山にあった。荒れ果ててはいるが、どこことなく草枕の世界を髣髴とさせてくれる。この漱石館から那古井を見下ろすと、今にも崩れそうな明治を忍ばせる古ぼけた建物が、崖を背にして幾軒もある。有明海を埋め立てる前は、温泉のある那古井館のすぐ前まで、海が迫っていたそう。俗を越えた非人情を味わう為には、温泉も旅館とともに岡へ引越さねばならなかったのだろうか。

明治と昭和との時の流れを差し引いたとしても、作品『草枕』の世界には、かなりの脚色があるようだ。実際に熊本を旅して、文学の世界とこの現実との落差を痛感した。